

そらうがく

(No. 72)

R4. 12. 13 発行

現職研修委員会

総合的な学習部編集



三年ぶりだからこそチャンスあり

総合的な学習部長 岩瀬 竜弥

笠をかぶり、藍や白の衣装を着た保存会の会員や有志、そして六南小の六年生が斎田に入り、太鼓の音や歌に合わせて苗を植えていきます。今年、百七回目を迎えた「六ツ美悠紀斎田お田植えまつり」です。実に三年ぶりの開催。戦争中も実施されたと聞いています。斎田の周りでは伝統の踊りも披露され、大勢の見物客らが田植えの様子を見守りました。

三年ぶりと言えば、対面で実施された市教育研究大会です。コロナ禍であつても九本の実践が発表され、西村公孝先生（鳴門教育大学大学院特命教授）にご助言をいただきました。私自身、西村先生とは平成十四年度に研究発表をした、竜南中・上地小・緑丘小の総合的な学習を中心とした交流実践に対してご指導を受けて以来の再会です。

レポートを読んで驚きました。子供が主体的・協働的に現代の課題（SDGs、防災、町づくり）に向き合っているではありませんか。SDGsの目標が総合的な学習の課題設定となり、防災や減災学習、町づくりについて、子供たちは学区や地域を見直し、よりよくしようとする探究的取り組みをしています。この子たちなら、将来、日本を背負っても大丈夫ではな

いかとさえ感じるほど。西村先生が、21

世紀を生き抜く子供を育むために失敗を恐れない教師、子供と共に学びを楽しむ教師、未来の道案内人として未来を創造する教師を求められ、中堅・若手を育てる責任を感じました。

ところで、市の無

形文化財であるお田植えまつりも三年ぶりとは言え、本年度も「お田植え歌」「お田植え踊り」などが例年通り行われるはずでした。しかし、保存会の総会には「なぜやる必要があるのか」「伝統は守るべきだ」「だれが踊りをやるのか」と、まさにそこは国会中継です。そして、今後継続可能なまつりへと知恵を絞り変貌したのです。その真剣な討論に、「これこそ未来を創造する姿」と胸が高鳴りました。実は、子供たちも影響を大きく受けました。

六年生が、米どころになった背景やそのための用水路などの環境整備を深く学び、過去、全員参加し



ていたまつりに希望者24名が当日参加。「伝統を守っていくのは大事なことです。大人になつても保存会の一員として、また田植えに参加できたら」と、取材に笑顔で応じました。三年ぶりが与えた深い学びのチャンスですね。

本年度の研究の方針

【研修部】授業力アップセミナー（基礎編）

今回は十七名の先生が参加されました。

研修①では常磐小・丸中美来先生が「アートマイル国際協働学習プロジェクトを通して」というテーマで実践発表されました。

人とのつながりが築きにくい、コロナ禍においても、オンラインを効果的に活用して台湾の小学校と交流した実践でした。交流を通して、改めて自分たちの地域を見つめ直し、探究を深める子どもたちの姿も紹介されました。

研修②では中京大学・久野弘幸教授から「令和の日本型学校教育とは何か？」というテーマで、講話をいただきました。

次期指導要領改訂を見据えて耳にすることが多くなった「令和の日本型教育」を掘り下げ、「指導の個別化」や「学習の個別化」とは何か、また今後求められる学びの姿とはどのようなものかご示唆いただきました。

研修③ではグループワークショップを行いました。SDGsや自然環境など五つのグループに分かれ、実践での困りごとの共有や改善方法など、活発な意見交流が行われました。

県教研の報告

十月十五日に、第七十二次教育研究愛知県集会在開催されました。岡崎の代表として、武井翔先生(竜海中)と岩田光憲先生(矢作南小)が参加し、協議の視点に沿って積極的に討論を行いました。

助言者の愛知淑徳大学・加藤智准教授からは、総合的な学習の時間における、自己肯定感の高め方についての話がありました。「失敗をした後に、どうするかを考える授業」を展開することの意義についてご助言をいただきました。

矢作南小学校 岩田 光憲

県教研では、「自分に何ができるのかを考え、自分たちなりの納得解を見出すこと」に焦点を当てた実践を提案することができました。参加された先生方からは、子供ファーストの授業構成について質問していただきました。

子供たちが主体的に活動するためには、教師主導にならないため、手だてを講じすぎないことを伝えました。そして、子供の様子を正確にとらえ、教師の出を我慢するなど、話し合いにおける教師支援の在り方について議論を深めることができました。

竜海中学校 武井 翔

コロナ禍の防災・減災対策を探究課題の柱とし、「主体的・対話的に探究し、新たな価値を創造する

楽しさを実感できる生徒の育成」を主題とした研究実践について発表しました。相手意識をもって防災アイデアグッズを実用化・寄贈する過程で、本気になって探究する生徒の姿を中心に提案しました。

助言者の先生から、「学級ごとに異なるテーマを設定する場合、そろえるべきは対象の本質(目標)である。探究におけるアプローチに違いがあってもよい。」と、本実践を価値付けしていただきました。

学び舎の総合耳寄り情報

四年生が防災井戸の井戸水を使って何ができるかを考え、生き物がすみ続けることができるビオトープづくりについて学習しています。整備された池に、伊賀川の生き物を捕ってきて放流しました。今後、児童が生き物や草花があふれるビオトープをつくり、地域の自然について学習していきます。



梅園小 大谷 哲平

全学年が学校の前を流れる青木川と関わっています。川遊びや美化活動、生き物・水質調査など、川と親しみ、川を守っています。これらの活動を通し、自然との共生について学びを深めています。



常磐東小 福田 しのぶ

本校の三年生は、学区に飛来する三種類のセキレイの分布調査を、老人会の方と一緒にを行っています。春からの調査で学区の地形や自然環境との関わりに気付いた子供たちは、他地域はどうか、市の鳥がハクセキレイなのはなぜかと視野を広げ、夢中になって探究学習を行っています。他に目を向けることが、学区を見直すよい機会となっています。



生平小 杉本 智恵

本校では、三年生が「共に生きる」をテーマに、バリアフリーについて学習しています。だれもが安心して暮らせるような工夫が学区にどれくらいあるのかを探し、実際に触れる体験から、学びを深めました。三学期には、自分たちができることを考え、地域へ発信していく予定です。



矢作東小 原山 友香

今年度の職場体験活動は、興味をもった職業の事業所に生徒自身でアポイントメントを取り、様々な職場を体験しました。本物の職場で「働く」ことは、自分自身のキャリアを考え始めるよい機会となりました。



福岡中 東浦 廉